

【論文】

動物園における「生きている動物」の教材化
—子ども動物園を中心として その1 教材化の視点—

Educational Activities using “Living Animals” in the Children’s Zoos
—Some Ideas to Emphasize the Educational Function—

並 木 美砂子*
Misako NAMIKI

Abstract:

Although many visitors with young children have a lot of chance to feel some impression about the relationship between children and the “live animals” in the children’s zoo exhibits, where children are allowed to touch or feeding the animals, there is no study to discuss the educational values from the view point of children’s behavior.

It should be thought of their interests relation to the “animals’ individuality (for instances, life cycle/nick name/episode/character)”, should be focused the human’s responsibility to keep/care of the animals, should be thought the animals’ tendency to contact with young children.

Furthermore, our efforts to emphasize the educational value of children’s zoos are needed to be discussed as a stage of primitive or emotional “environmental education”.

問題と目的

博物館諸施設の中で、動物園の特徴は、言うまでもなく「生きている動物」の展示と、主としてそれらを用いた教育的活動の展開という点にある。とくに、子ども動物園 (Children’s zoos) では、家畜や愛玩動物など人に馴れやすい動物 (以下、「家畜類」と呼ぶこととする) を使った活動が多く見られる。

これらは、一般的には「触れ合い」という活動名で称されることが多く、それは、子どもを中心とした来園者が、家畜類に直接触れたり、抱いたり、餌を与えたりなどが、ある程度、許されているような諸活動を示している。

子ども動物園の展示をはじめ教育的な活動について、欧米では、展示動物の種類や活動内容の

吟味が進められている動物園は少なくない (Schneider, 1982、Zucker, 1986、並木, 1995)。

近年では、生きている動物の展示に加え、遊びの要素やハンズオン展示を兼ね備えた場への転換をはかる動物園も生まれている。これらの傾向は、子どもの年齢や興味に応じて、彼らが動物に親しみを感じ、興味を抱き、しかも楽しめる子ども動物園づくりをめざすという点で評価できよう。

残念ながら、日本の子ども動物園では、このような類いの論議が進んでいるとはいえない。動物への親しみや、動物と過ごす楽しめとは、どのような意図に基づく展示方法や活動内容のもとで、生み出されるものなのであろうか。また、子ども達の感じとったことを、動物園のスタッフ側はどうしたら知ることができるだろうか。

* 千葉県動物公園

たしかに、毎日、子ども達と接し、よりよい展示方法や活動内容を考え、工夫しているスタッフも多い。しかし、概して「触れ合い」は、その動物の魅力と子ども達が見せる積極性、そしてスタッフの個人的努力に任されてしまう部分も多いようである。イベントではない日常的な取り組みのなかで、子ども達ひとりひとりに働きかけ、それらの活動の持つ教育的可能性を見い出すような、内容の深い吟味までには、残念ながら至っていない。

現代の都市化された環境では、子ども達はペットとの生活もままならない。生きている動物、それも存在感あふれる哺乳類や鳥類などと直接に接する機会は、時代とともに失われてきているといっても過言ではないだろう。筆者は、子ども動物園のどのような展示や教育活動が、来園者に何をもたらさうか、その可能性を模索する必要を強く実感する。

以上の問題意識に基づき、本論の目的は、まず、子ども動物園のターゲットに対する動物展示のありかた、および「触れ合い」にみられるような教育的活動について、日本の動物園の現状に考察を加え、さらに、動物展示上、および教育的活動上の必要な工夫について、自身の考えを述べることにする。

1 動物の教材化の動き

展示動物を教材として生かす、ということはどういうことだろう。

近年、「動物科学館」や「資料館」のような名の比較的大規模な展示施設で、実物標本やレプリカを駆使した展示が行われる場合が見られるようになってきた(注1)。講義室やビデオルームも備え、閲覧可能な図書室をもつところも少なくない。この動きも、たしかに動物の教材化のひとつとして見ることもできるだろう。しかし、これらの標本類の活用ということになると、全体としては教育的な活動に利用されているとは言えないようである。

これら、とくに動物の派生物(骨格標本や羽毛・毛皮・卵標本・足跡の型など)の利用についてなされた全国的な調査としては、最近の日本動物園水族館協会の「派生物利用調査」(日本動物園水族館協会北海道ブロック、1993)があり、次のような問題が指摘されている。すなわち、飼育動物の派生物(羽毛・体毛・フットプリントなど)や標本類(卵・毛

皮・骨格標本・剥製標本など)を計画的に収集しているのは、123園館中わずか10施設にすぎず、そのうち採集マニュアルを持つのは、わずか2施設であるという。動物園や水族館においては、教材としての活用を念頭においた派生物の収集や保管が、系統だって行われているとはいえない。

また、生きている展示動物の教材化に限っていえば、動物の観察のポイントを教えたり、質問に応じたり、あるいはガイドツアーなど、「人」を介在させた活動は確かに教材化のひとつの方法とみることもできよう。補助的な手段としてスライド・ビデオ、あるいは二次的な資料を活用し、教育的なメッセージを伝えようとする場合も見られる。

しかし、これらの派生物利用や人による教育的な活動は、教材化のプロセスとしてどう位置づけるべきであろうか。あれこれの教育的活動の展開を、「教材化」のプロセスのどの段階であるかを、しっかりと押さえる必要があるように思われる。

教材化のプロセスには、まず第一に、動物園側が「何を」「だれに」伝えたいか・伝えるべきか、そしてそれはなぜか、を明確に意識することがおかれるべきである。次に、そのために、展示動物の何がどう使用できるか、を探索し、試すべきである。展示動物以外に、もし使える標本や派生物、二次的資料があるならば、それを探索する。不足するものがあるなら、自ら作り出す事必要だ。

そして、教材化の過程で最も大切なことは、「来園者が何を求めているか」を知ることであり、その理由を考えることである。動物園が目的を持って行う様々な教育的活動の、主たるターゲットはだれであり、動物園自身が、どんな情報を届けたいかを明確にすればするほど、教材の価値を問いやすい。同時に、ターゲットの求めるものをつかもうとすればするほど、展示動物の潜在的な教材としての価値が見出されるようになる。

動物の教材化は、動物園側と来園者の側の両者の協力のもとで進み、両者の相互関係のもとで深化する。

たとえば、生きている動物への、さまざまな年齢の来園者による物理的接触がどんな配慮のもとで許されるべきかを考えようとしたなら(ヘディガー、1983、Hopkins、1992など)、誰でも、まず、「目的は

何か」を考え、「誰を対象に」しているかを問題とし、さらにその「対象となる人々が望んでいること」を深く検討するだろう。

教材化には、こうしたプロセスがあり、しかも、自己完結することはなく、必ず次のステップ（新しい教材・活動の探索）へ連綿とつながっていくものである。

そこで、まず動物園は、自ら「伝えたいこと」「伝えるべきこと」を責任を持って明らかにし、それを出発点にする必要がある。

2 何を伝えたいのか——展示の目的

博物館における展示資料が、何のための展示か、その目的に応じて展示されるのと同様、動物園における展示動物は、何のために飼育され展示されているかが明らかでなければならない。

通常は、動物の種類に応じて、展示のしかたが選択され工夫されるが、それだけでなく、何を伝えたいのか、何を主要な要素として抽出し、それらを見せたいのかも、大切な視点である。そこでは、生きている動物を中心としつつも、来園者に何を伝えたいかによって、さまざまな教材や補助的な資料が展示と関連させて選択されるべきである。須磨水族館の吉田氏は、生きている動物の展示の目的は、動物たちの「生きざま」を見せることだと言っている（日本動物園水族館協会、1990）。どのような生活を送る動物なのかを知ってほしい、ということである。また、Dealy, H. (1992) は、飼育者の「飼育上の努力の内容」を展示したり、知ってもらえるような教育的働きかけをすべきだと主張している。ひとつひとつの飼育上の工夫や独自の技術が、教育的なメッセージを持っているのだと言う。

これらの主張は、あれこれの動物の種類自体が問題なのではなく、「何を伝えたいか、伝えるべきか」から、展示動物の種類や展示法も考えられるべきだ、という意味が含まれていると筆者は考える。どんな動物であっても、「生きざま」を見せようとしたら、本来その種の持つ行動が発現できるよう、生息環境の主要な要素を注意深く抽出した、飼育環境が必要となる。

この、「何の種類の動物を展示するか」だけでなく、展示の方法も重要だという考えは、一方では「動物

の福祉」を重視する動きの中で生まれたが、他方、来園者がその展示から受けとる情報や、情緒的な感情（たとえば、動物たちが伸び伸びと暮らしているように見える、など）の問題も大きいという、動物園側の自覚も促した（Price, E.C. et al 1994）。動物園には、動物それ自身にとってのよりよい飼育法の開発もさることながら、来園者がそれによりポジティブな感覚を持ち得るような展示法および教育的活動の展開が期待されていると思われる。

ここには、とくに年少の子どもが数多く訪れる「子ども動物園」の展示法や教育活動に対しても重要なヒントが隠されている。動物の飼育、つまり世話の内容、およびそれらの動物の側にとっての必要性が、見ている方にもわかることが大切で、それらの「世話」に支えられて、動物たちが今そこに「生きているのだ」ということが子どもにも実感できる、そういう工夫が求められていると言えるだろう。

3 ターゲットは誰か

たくさんの方々の来園者と年少の子ども達

'94年現在、日本動物園水族館協会に加盟する動物園と水族館の数は150園館を超え、年間の来園者・来館者も1億人に近い（'93年）。世界に目を向けても、年間約6億人ものビジターを迎える動物園は、その数の点からだけいえば、博物館施設の中のトップの位置を占めているのはまちがいない。

しかし、これだけの大勢のビジターたちは、何を動物園に求めて動物園を訪れ、何を学ぶのであろうか。Tunnicliffe (1995) は、動物園の来園者たちが、自然保護や絶滅から動物を救おうという動物園からのメッセージに対してよりも、むしろ自分たちの既存の知識に基づいて展示を見て回っていること、そして、幼児を含む家族連れの来園の動機のほとんどは、レジャー的な目的によるものであり、動物園が訴えたい教育的なメッセージを伝えるには、もっと工夫が必要であるのではないかと指摘した。

では、このレジャー目的の家族連れに対しては、どのような働きかけができるのだろうか。

動物園への来園の形態は、たしかに多くの場合家族連れであり、たとえば上野動物園の場合は、来園者の「マジョリティーは30代の両親（特に母親）と3才前後の子どもである」（石田、1997）。

年少（以下、ここでは、幼児からせいぜい小学校低学年、すなわち2、3才から7、8才をさしている）の子どもたちは、通常、大人もしくはより年長の子ともと一緒に来園する。これら年少の子どもたちは、確かに主たる来園者であり、彼らをターゲットとする取り組みは次の点において意義深いと思われる。

そのひとつは、子どもと展示動物の間でどんなことが起きているかが、非常に豊かにとらえられることだと考える。いわば動物園における子ども達の行動学である。

むしろ、教師に引率されてくる学校グループの子ども達は、明確な教育目的を持つ（あるいは持たされる）場合もあり、来園目的と関連させた行動調査も可能である。だが、とくに幼児を連れているファミリーや、保育所の幼児を連れてきている団体の場合は、かなり事情が異なる。「あれこれの動物を見たい」「これを観察したい」という動機もそうだが、同時に、「動物と間近に接する子どもの様子や姿を見たい」という大人のもつ動機の方も、大きく働いているように見受けられるのである。

つまり、わざわざ動物園に出かけて行って、子ども達に動物を見せたいのは、子どもがどんな動物に興味を抱き、どのような関わりあいかたをするかを知りたい、という気持ちが大きいように思われるのだ。さかんにビデオや写真を撮ろうとする大人たちの気持ちの中には、こうした「関わりの様子」を記録にとどめたいという動機が働いているように思われる。

また、実際に、保母さんの話の中からは、次のような発言が聞かれる。動物に餌を与えている子どもの行動を見て、無理やり食べさせているように見えたのか、日頃の自分たちの受け持っている子ども達への「給食指導そのものだ」という発言、「あんなにあの子が動物をかわいがれるなんて、普段の姿からは想像もできない、私たちは初めて気づいた」などである。

その他、たとえば、動物の採食の場面や排泄の場面に会った子どもが、じっとその場を動かず見入っている姿に、いっしょに共感しようとする親たちの姿もよく見られる光景である。子どもの向けられた興味や関心の方向に、無意識のうちに大人自身

が関心を持とうとする姿だと言えよう。

子ども達が、動物園でのどんな場面に関心を持ち、興味を持續させているか、などは、とくに子どもの心理発達の具体的な姿をとらえたいと考えている保育者にとっては、興味深い事象であるようだ。幼い子どもの持つ好奇心の発現は、生きている動物たちを目の前にしたとき、明瞭な形で見ることができ（河崎, 1996）、そこからの情報は、後述するように、「触れ合い」の内容を考えると重要な要素だと筆者は考える。それは、動物園側はもちろん、子どもを連れてきた大人たちが、どのような役割を動物とその子ども達の間で果たせるかを、考えることでもある。

この立場から考えられる具体的なプログラムについては、「実践」のところで展開するので、ここでは触れないが、基本的には、子どもをターゲットとして明確に認識することは、教育的な機能（そこで展開されていることの教育的意味）を発見する契機になりうると筆者は考える。

4 「触れ合い」は子ども動物園のメインテーマ

日本動物園水族館協会では、1996年に各園館の教育活動の実態調査を行っており、動物園における教育活動の基本方針は、「動物との触れ合い」をうたうところが最も多かったこと、その理由のひとつを、子ども動物園の存在によると報告している（日本動物園水族館協会の全国大会での報告資料）。

それによると、子ども動物園を園内に置いている動物園は、96園中58園で(71.6%)、主としてカイウサギやテンジクネズミ、ヤギやヒツジなど愛玩動物や家畜が、実際に子どもが直接触れることができる動物である。

実際に、それを日動水加盟園館の年次報告をもとにして、飼育頭数の経年変化から確認してみよう。

テンジクネズミは、66年当時、全国の動物園全体でもわずか500頭にも満たない飼育頭数であったが、飼育する園数も平均飼育頭数も、そして結果として全国の動物園の飼育頭数合計も、70年代から90年代にかけて、増えてきている(図1)。齧歯類全体の飼育頭数の伸びと比べても、テンジクネズミの伸びが多い(図2)ことは、この「触れ合い」の対象として、テンジクネズミが増やされ続けてきたことを裏付けている。全園での哺乳類の飼育頭数の伸び率を

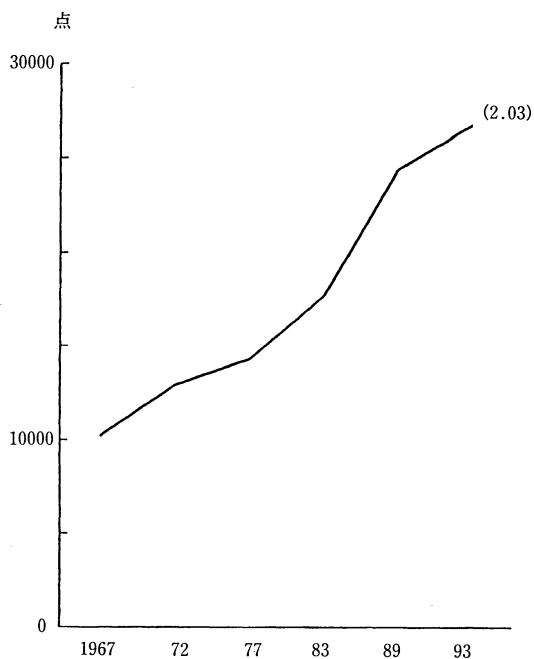


図1 哺乳類の飼育点数の変化（動物園）
（ ）内は'72→'93の伸び率

(指数・1966年を1とする)

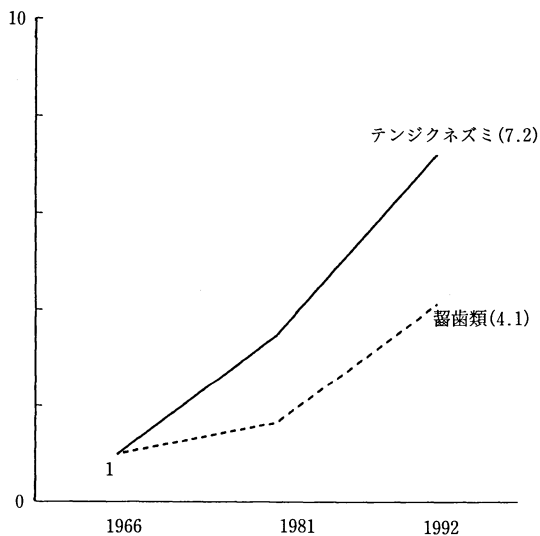


図2 動物園における全齧歯類とテンジクネズミの飼育頭数の増加指数

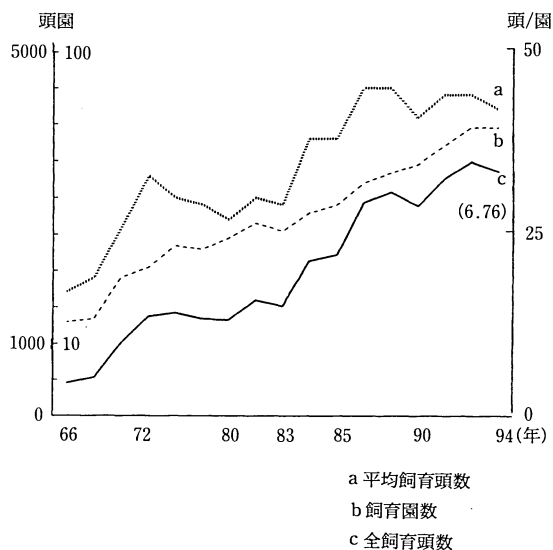


図3 年度ごとのテンジクネズミ飼育園数・飼育頭数の変化
(数値は日動水年報より)
()内は'72→'93の伸び率

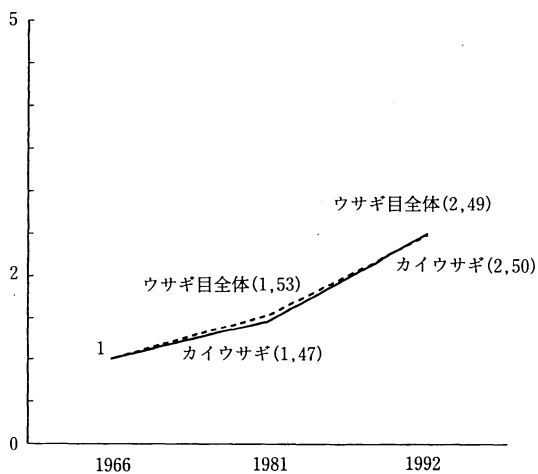


図4 動物園における全ウサギ類とカイウサギ飼育頭数の増加指数

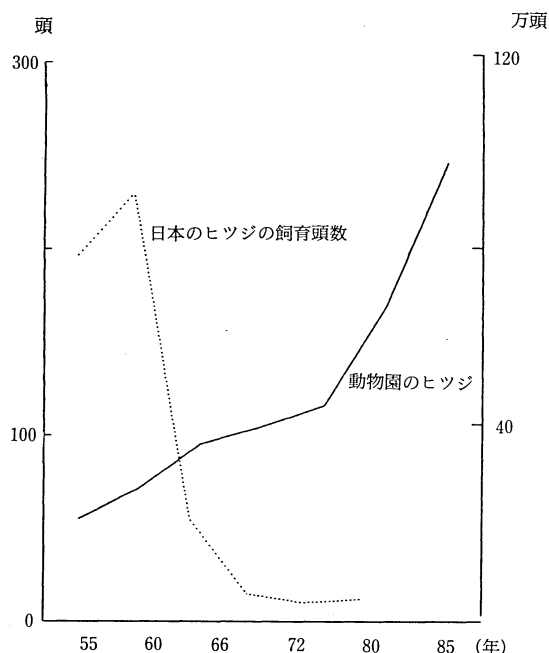


図5 ヒツジの飼育頭数の変化

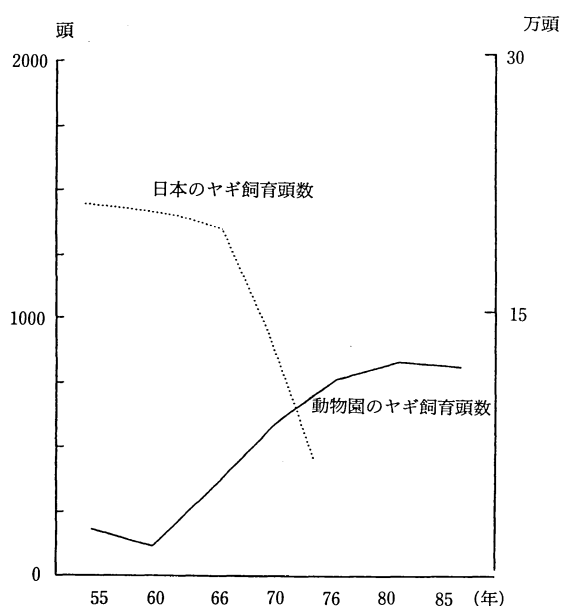


図6 ヤギの飼育頭数の変化

みても、それを上回る頭数の増加である(図3)。

一方、カイウサギは、確かに動物園全体での飼育頭数は増加しているものの、テンジクネズミの伸び率に比べ、増加指数は小さい(図4)。これは、おそらく、飼育・繁殖のさせやすさ、子どもへの安全の点からも、「触れ合い」の対象動物としては、カイウサギよりもテンジクネズミのほうが、適しているからであろう。

また、ヒツジについては、日本の畜養家での飼育頭数が戦後から60年頃まで急速に増え、その後激減しているにもかかわらず、動物園では逆に70年代後半から85年にかけて急速に増加している(図5)。この現象も、いわゆる産業の対象ではなく、動物園で触れ合いの対象として飼育されている家畜がいることを示していると思われる。ヤギも、戦時中、食料難を救うためにだいぶ飼われていたが、60年代以降、数を減らしているのと同様に、ヒツジと同様、動物園での飼育頭数は増加しているのである(図6)。

以上、飼育動物の種類と数の増加の点から見ても、「触れ合い」を重要な活動の内容として動物園が取り組もうとしてきており、そして現在もその傾向が強いことが伺われる。とくに、テンジクネズミを主な「触れ合い動物」に考え、その数を増やしていることは、大きさやおとなしい性質、飼育のしやすさなど、子どもの側と飼育する側との両方の利点が一致する種類であるためと思われる。

5 家畜類の展示にはどんな視点が必要か

人に馴れ、人の生活を物心ともに豊かにするために、長い年月をかけて改良されてきた家畜類たちには、2つの側面がある。ひとつは、家畜類にも、当然、「生物」としての特徴があること、もうひとつは、人との関わりの中で改変されてきた特徴が加わっていることである。とくに、後者の特徴は、人間に都合のよい性質を注意深く選択してきた歴史、扱いやすいよう馴化させてきた歴史と深い関係がある。生物としての一般法則をもちつつ、人間の歴史の所産であるという、実は非常に複雑な諸過程が、家畜類の中には存在する。

そのため、家畜類の展示には、野生の時代に人間がかれらのどんな特徴に目をつけたか、そして、家畜化には人間のどんな技術が必要だったか、などが

わかるような工夫が必要である。たとえば、家畜類の多くは群れ社会を持っており、そのため、人間が群れのリーダーをコントロールすることで群れ全体を馴化させることに成功した。乳の利用のためには、常に母獣が妊娠しているような状況を作り出す必要から、繁殖のコントロールの技術が獲得された。オスの去勢の技術もこの過程で生まれた。良い形質を残すための遺伝の知識、間引きや淘汰も行われた。目の前の家畜類たちのたどった歴史が、人間との深い関わりのおかげで、よくわかるような情報も、動物展示と同時に必要だと思われる。

また、家畜類のもつ「馴れ」の要素もまた、教材化に生かすことができる。家畜類や愛玩動物などは、自ら子どもへの接近的な行動をとる場合が多くみられる。この性質は、かれらがその家畜化の過程で、人間との特別な関係を結んできた証でもある。とくに興味深いのは、彼等が見せる人間の幼い子ども達への接近的態度である。明らかに、大人に対するのとは異なる行動が見られる。この、人間の子どものに対する接近的な行動は、それぞれの動物が生まれながらに持つ性格を示す上で貴重な情報となりうる。人間が、なぜ彼等を家畜としてあるいは愛玩動物として、生活をともにできたかを示唆するに十分な情報なのである。動物自身の生活史の中で、人間との出会いがどのような意味を持ったのかも、人間への接近的な行動の特徴から類推できる。動物との接近や接触の体験を豊富に持つことで、その体験に常に立ち戻りながら、「人間と社会化された動物＝家畜たちとの関係」を熟考できると筆者は考える。

さらに、これは難しい試みかもしれないが、家畜類の再野生化の事実も展示できればなおよいと思われる。家畜であっても、条件さえ整えば、野生化の道をとることは自明である。しかし、これを動物園の展示法のひとつとして具体化するのには、そもそも動物園が人工的環境であることから、たいへん困難を伴うだろう。しかし、実験的環境を整えるなら（この場合、「実験をしている」という情報を来園者に伝えて）、小動物などであれば可能であろう。この、再野生化の現象を展示することは、家畜類が遠い昔に持っていた暮らしぶりを彷彿とさせ、人間の影響を逆に思い起こさせる上で、有意義だと思われる。

6 子ども動物園での野生動物の展示の視点

子ども動物園には、家畜類だけでなく、小型の野生動物も展示されていることが例外ではない。しかし、家畜類と関連させた野生動物の展示方法が、もっと考えられるべきだ。

子ども動物園の野生動物は、「なぜそこにその種類が展示されているのか」という意味が来園者に伝わるような工夫が必要である。その意味を、筆者は次のように考える。

ある種の野生動物には、「実際に人に馴れる性質がある」ことを示し、この性質が家畜化の過程で利用されてきたことを想像させるのである。つまり、動物の側も、積極的に人間社会を利用しようとする場合があることを示すのがよいと考える。「馴れ」というのは、人間の側からの意図的働きかけだけでなく、動物のほうにも、人間社会に接近することで天敵から逃れ、食べ物も確保することができたという「人間社会の利用」があったことを理解してもらうことが必要だ。野生動物と人間との相互交渉の歴史は、まだまだ未解明のところも多いが、研究成果を取り入れて、この複雑な諸過程を知らせていくことは、人間と動物たちとの未来を考えさせる上でも大切なことであろう。

7 「飼育」を展示する

動物園は、博物館の中でも、「飼育」活動そのものを展示できるというメリットがある。生きている動物たちを資料として飼いつづけ、そこから何らかの情報を引き出せるわけだが、この「飼う」行為自身を展示内容として位置づけることが可能である。

しかも、子ども動物園は、来園者にいろいろな体験を用意しやすい場でもある。身近な家畜類の飼育の方法を知ること、あるいは、その一過程を実際に体験できることは、その場限りの特殊な体験ではなく、実際の毎日の生活の中でも十分生かせる内容を含んでいる。たとえば、動物の気分を読み取る方法や、排泄を促す方法、など。

つまり、動物たちの飼育の内容や方法を知することは、知識としてだけではなく、動物たちの持つ生活要求や、合理的な飼育方法の理由などを理解することであり、実感としてつかむことでもある。そして、より大切なことは、人間に全面的にその生命を委ね

ざるを得ない動物たちへの責任を自覚し、情緒的な深い感情をも引き起こさせる可能性がある」と知ることである。

「互いに生きている」ことの実感、こうした体験的な展示法のなかで、より得やすいものと考えられる。もちろん、年少の子どもが自分だけでこれらの情報を取り入れることはありえない。周囲の大人（もちろん動物園側の職員も含めて）働きかけの中で、養われていく（Andersen, 1993）ような「実感」である。子どもは、人間関係、つまり他の人々との信頼関係の中で、どういうことが大事な情報かを判断していく場合が多いからだ。

8 個性性に注目した展示と 「触れ合い」活動の展開

子どもたちは、動物の「呼び名」を知るのが好きである。相手の名を呼び、自分のほうを向いてくれたり、自分や友人の名と同じ名をみつけると、記憶に残るようだ。よく、リピーターの子どもと話をしていると、「このあいだ抱いたモルモットの〇〇ちゃん元気？」など、個体名で覚えていることが多い。

家畜類は、その毛の色や耳の形などから、個体識別しやすい種類が少なくない。絵や写真をそえたカードなどで、特徴をうきぼりにした個体カードは、識別の際、とても役に立つ。そして、動物たち一頭一頭の生活の様子をエピソードとして提示できると、単に「動物園の展示動物」ということではなく、自分と特別な関係をもった「その動物」という印象をもたらしやすい。ウサギ一般ではなく、そこで自分が餌を与えた、世話をした、「そのウサギ」が大切なのである。

年少の子どもが求める「触れ合い」の内容には、このような個性性に注目した活動を取り入れることが大切だと思われる。見ただけでは得られない皆さんの「飼育に関する情報（飼育担当者がどんな努力をはらっているか、個体別の生活情報など）」も大切な教材としての利用に役立つはずである。

個体の歴史やエピソードに対する興味は、先述の「生きていることの実感」を体得する上での原動力ともなる。しかも、彼ら一頭一頭それぞれの出生や成長、個性、病歴、繁殖、などの個別情報を正確に収集・整理していくことは、動物園にとっても、貴重

な情報の蓄積である。動物との具体的な関わり合いを、「自然と関わる豊富な体験」（志摩、1984）だとすれば、その豊富さを、これら「豊かな個体情報」が支えるのである。そして、来園者への情報提供のしかたを考えることで、どのような提供の方法が効果的であるかも、動物園側に経験として蓄積される。

9 家畜類の「飼育」の展示の問題 ——残された課題——

家畜がそもそも持っている「経済性」「生産性」を考えると、子ども動物園での家畜類の「飼育」の展示には問題もある。本来、家畜の飼育は人間の都合にあわせて「管理され続ける」ものである。そこには、経済的な効率の問題とされ、管理方法としての淘汰や、ある時期における屠殺も、当然含まれている。

人間の側による利用の側面を考えれば、こうした淘汰や屠殺が行われている事実は、すべての人々に明らかにすべきであろう。たとえば、理科教材として家畜の問題を扱う場合は、この事実を事実として教えることはよくある。しかし一方、ウシやブタなど、たとえ食肉目的の家畜も、いったん子ども動物園での展示動物としての役割を与えられると、これらの「死」は闇にかくされる。展示動物としての役目を終えた動物たちがどのような運命をたどるか、それを来園者への情報として明らかに示すような実践は、日本では行われていない。

また、先に「触れ合い動物」としてあげたテンジクネズミは、南米ではいまだに食肉目的での飼育が主であるところがあるにもかかわらず、欧米や日本では愛玩動物である。こうした地域による家畜類の飼育目的の違いの問題もある。

欧米の子ども動物園では、教育プログラムのひとつとして、この家畜利用の文化の差異を示したり、ブタの解体の場面の公開などに取り組むところもある（注2）。日本の子ども動物園は、こうした家畜類の飼育について、かれらの行く末も含め、どんなフィロソフィーをもつべきだろうか。深く、重い課題である。

結論および考察

年少の子ども（3歳前後から7、8才の小学校低学年児童をさす）をターゲットとした場合の、家畜類（子ども動物園における家畜や愛玩動物などの展示動物をさす）の教材化の視点は以下のとおりである。

- 1) 個体の歴史や生活に関する具体的なエピソードを、大切な情報として提供する。これは、心理的な接近をもたらす上での工夫である。
- 2) 動物たちの生活と、自分の生活（食べること、排泄すること、身を守ることなど）とを比べてみることができる工夫をする。
- 3) 家畜類と野生動物を関連させた展示を考える。
とくに、野生動物の持つ「馴れ」の問題をとりあげる。また、できれば家畜類の再野生化も展示内容にとりあげる。
- 4) 「飼育」の内容が、重要な展示の要素となるような工夫をする。そして、人間が世話をしなければ生きていけない動物に対する人間の「責任」を感じてもらふ工夫をする。
- 5) その動物自身がもつ「人間との接触・接近要求」を大いに利用する。
- 6) 子どもを連れてくる大人がもつ興味・関心は、「子どもが動物とどのような関係を持とうとしているか、そこから何が見えてくるか」にあることを念頭に置いた触れ合いの場、そして、大人も子どもも体験を共有したり好奇心を触発されるような場の整備をこころがける。

＜「生命」に接近した体験の共有＞

動物園での生きている動物たちを駆使した教育的な働きかけという点では、次のような動きを見ておく必要がある。世界的には、1980年のWCS (World Conservation Strategy) を受けて、国際動物園教育者協会 (International Zoo Educators Association) (通称 IZE) が、1984年の国際会議で3つの地域別ワーキンググループを設立し、この戦略を動物園が実践していくためのプログラムを考案し始めた（たとえば、Keating, 1987）こと、また、国際動物園長連盟 (通称 IUDZG) と飼育下繁殖専門家集団 (通称 CBSG) が1993年、共同で「世界動物園保全戦略」を

発表し、そこで動物園が環境教育を担うべきであると明確にしたこと (IUDZG・CBSG, 1993) など、自然の保護に動物園が寄与すべきであり、その方法のひとつとして、数多い来園者への教育活動をメインにしていることがうかがわれる。たとえば、IZEの提唱したプログラムのひとつは、「それぞれの地域の身近な生き物たちを用いて、子どもたちに自然のなりたちの基本を教える」(Keating、前掲書) というものである。

日本の動物園も、「種の保存」と「環境教育」を活動の2本の柱として社会的にその責務を果たそうという点では、異論をみない。そして、実際の教育的な活動の中にも、展示動物そのものについてのいわゆる解説的なものだけでなく、様々な現代的な環境問題や自然保護と関わらせた諸活動の展開を認めることができる。

これらの世界や日本の動きを視野に入れながら、とくに「年少の子どもを対象とした教育的な働きかけの内容や方法」を、具体的な実践の積み重ねの中で開発していく必要があると思われる。本論で触れたように、年少の子ども達は来園者のかなりの部分を占め、必ず大人もしくは年長の子どものといっしょにやってくる。周囲の大人や年長者とのやりとりのもとで、生きた動物と関わるという点は、確かに複雑だが、逆に言えばそこに展開する子ども達の諸行動は、動物園側にとっても、教育的活動のヒントの源泉でもある。

動物園が展示動物を介在させて、年少の子ども達に用意できる体験とは、第一に「生命そのものに接近した体験」が中心におかれるべきである、と筆者は考える。つまり、動物たちが「どんな生活を送っているか」がわかりやすいことが必要だと考える。

食べること、排泄すること、暮らしの場所、子どもが生まれること、死ぬこと、これらの事実が目の前に展開することが大事なのである。そして、それら事実について、子どもどうし、あるいは大人と子どもとのあいだで、語り合うことが重要な意味を持つ。目の前で起きていることを言葉にするのは、相手の感じていることや疑問に思うことをそれぞれ自分のものにし、共有するのに重要な役割を持つ。言い換えれば、そこに豊かなコミュニケーションが成立する可能性がある。

生きている動物であれば、予想もつかない行動を見せたり、それまでのイメージをくつがえすような事実に出会うことも当然ある。そうした具体的で、その時しか経験できないようなたくさんのできごとを、生きている動物たちがもたらすのだ。

＜環境教育のどのような分野を動物園は担えるのか＞

岩田は、環境教育は科学教育の一分野として成立すべきであるとし、ひろく国民の教養として、独立した教育内容にすべきだと主張している（岩田、1995）。幼年期から成人に至るいずれの段階にも、原体験を含む自然学習があるべきで、その自然学習を重要な内容として含みつつ、構造化された科学教育として、環境教育をとらえたいという。

筆者もこの主張に同意する。「環境教育」という名のついたさまざまな教育的な活動が、学校に限らず、地域でも展開され、それらは確かに人間と自然環境との関わりあいを深めていくことを、共通項としているようである。しかし、それらに教育的な何らかの効果が認められ、人々の日常生活に影響を与えうるとしても、そのことと、「科学教育」として構造化された環境教育の内容をめざすこととは違う。後者には、教材を吟味・厳選し、目的に添った教育内容を整えるという作業が必要になるからである。

動物園は、この前者の「さまざまな教育活動の展開」と、後者の「構造化された科学教育」の橋渡しを成しうる場になるべきだと筆者は考える。

つまり、動物園で展開される「生きた動物たち」の教材化の試みは、一方では、来園者のみせる様々な反応や興味の動向から、それら動物たちの教育的価値を引き出し、他方では、どんな活動が、より科学教育として有意義であるかを抽出することでもある。その場合、動物園はあくまで「生きた展示動物」の利用に固執すべきである。なぜ、その活動が動物園でなければならないのか、を明らかにしていくことが必要だからである。

また、学校教育での実践例（高橋、1993）に見るように、生きている動物に自分の生命とのつながりを共感し、認識として自然界のなりたちと人間の位置をしっかりとらえる、そうした自然学習の一分野を動物園は担えるであろうし、その努力が求められ

る。

何より大切なことは、子どもたちが様々な自然の事象について、あれこれの知識を詰め込むよりも、信頼できる大人や年長者との関わりの中で、あるいは子どもたち同士の関わりの中で、自然の存在が魅力的であることを実感していける場が、あり続けることだと筆者は思う。子ども動物園は、明らかにその場のひとつになるべきである。

また、実践的な博物館教育学の成立（広瀬、1977）を考えるならば、そして、「如何に生活の中で役立つ」博物館づくりをめざすか（樋口、1993）が博物館教育学の課題であるとするならば、「子ども」と「生きている資料」との関係に注目した、いわば子ども動物園教育理論の構築に、この立場は貢献するものと思われる。

その具体的な展示法上、活動上の実践及び評価の問題について、次回で述べることにしたい。

謝辞

本論文を準備するにあたり、お茶の水女子大学の鷹野光行先生には励ましをいただきました。感謝いたします。

注1) 横浜金沢動物園・多摩動物園・のいち動物園など、来園者サービスや情報提供を行う中心的施設がここ10年あまりの間に、動物園の中に設立されている。

注2) コペンハーゲンの子ども動物園では、実際にブタの解体を子どもたちに見せるプログラムを持っている。

また、その場面を録画し、来園者が常に見ることができるよう、エデュケーションハウスではエンドレスで流している。

文献

- Andersen, L.L.(1993) Reach the Adult Visitors Through Their Children. Journal of the International Association of Zoo Educators. 29 : 134-137
- Dealy, H.(1992) Environmental enrichment: Educational implications, Journal of the International Association of Zoo Educators

- No.25, 20-22
- ヘディガー・H.(1983) 動物と人間の関係 「文明に囚われた動物たち」第12章 思索社(原題は“Wild Animals in Captivity”(1950))
- 樋口清之(1993) 博物館の将来にむけて 博物館学雑誌 Vol.18, No.1, No.2. 1-4
- 広瀬 鎮(1977) 博物館社会教育の展開をめぐる一考察 博物館学雑誌 Vol.2, No.1, 2. 15-30
- Hopkins, C.(1992) Animal Contact: Dare we touch? Journal of the International Association of Zoo Educators No.25,
- 石田 戡(1997) 動物園の課題 動物園研究 Vol.1, No.1, 2-16
- IUDZG and Captive Breeding Specialist Group of IUCN/SSMC, (1993) The World Zoo Conservation Strategy, Chicago Zoological Society
- 岩田好宏(1995) 自然教育論基礎論 千葉生物誌 Vol.45 No.1, 35-44
- 河崎道夫(1996) 子どもと生きもののかかわり ちいさいなま 96年9月号 34-39
- Keating, B.(1987) The Zoo's Role in the World Conservation Strategy, Journal of International Association of Zoo Educators, No.17, 16-18
- 並木美砂子(1995) 「第1回子ども動物園シンポジウム」の概要 博物館雑誌 Vol.23, 58-64
- 日本動物園水族館協会(1990) 動物園・水族館のあり方に関する調査研究・協議会報告書 57-58 (1989年11月の動物園・水族館のあり方に関する討論会パネルディスカッションの中での吉田啓正氏の発言)
- 日本動物園水族館協会北海道ブロック・動物園(1993) 派生物の利用状況について 第41回動物園技術者研究会宿題調査報告資料
- Price, E.C., Ashmore, L.A., McGivern, A.(1994) Reactions of Zoo Visitors to Free-Ranging Monkeys, Zoo Biology 13 : 355-373
- Schneider, G.(1982) Design Features of Children's zoos, in Karen Sausan (Ed.) Zoological Parkland Aquarium Fundamentals, 127-140
- 志摩陽伍(1984) 自然認識の発達と教育的働きかけ「自然認識の発達と人格の形成」第2章 新生出版
- 高橋洋子(1993) 動物園から生命尊重の心を学ぶ 生活科 日本動物園水族館教育研究会誌1993 pp.36-44
- Tunncliffe, S.D.(1994) Are Zoo visitors interested in conservation? Paper given at 7th IOSTE symposium
- Zucker, B.F.(1986) Fifty years of American Children's Zoos, AAZPA Annual proceedings pp.452-459